

第 14 回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成 29 年 11 月 17 日（金）
15 時 00 分 ～ 17 時 00 分
文部科学省 5 階・5F4会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査，森山副主査，石黒，入部，川瀬，塩田，鈴木，滝浦，田中，
福田，やすみ，山田，山元各委員（計 13 名）
（文部科学省・文化庁）西田国語課長，鈴木国語調査官，武田国語調査官，
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第 13 回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
- 2 分かり合うための言語コミュニケーション（仮題）（案）

〔参考資料〕

- 1 伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過の報告）
- 2 タイトル案などについて

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）
- 国語に関する世論調査 分類別問い一覧（平成 28 年 12 月 6 日版）

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 配布資料 2 「伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過の報告素案）」について説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
- 4 参考資料 2 「タイトル案などについて」について説明があり，タイトルについて意見交換が行われた。
- 5 次回の国語課題小委員会について，平成 29 年 12 月 15 日（金）午後 3 時から 5 時まで旧文部省庁舎 2 階・文化庁特別会議室で開催することが確認された。
- 6 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

ただ今から，第 14 回国語課題小委員会を開会いたします。本日は，前回の議事録（案）の確認，コミュニケーションの在り方及び言葉遣いについての協議の順で進めたいと考えております。

それでは，コミュニケーションの在り方及び言葉遣いについての協議に移ります。

先月 27 日の国語分科会で，審議経過報告を終えたところですが，より良い，また，いろいろな方面で活用されるような内容になるよう，引き続き皆様方のお力をお借りしたいと思っております。

配布資料 2 「分かり合うための言語コミュニケーション（仮題）（案）」を御覧いただきたいと思います。これは主査打合せ会のメンバーと事務局を中心として，審議経

過報告の内容を更に整理し、新たな部分を付け加えたものです。まず事務局から、配布資料2の報告（案）について、審議経過報告からどのような変更があったのか、その概要の説明をお願いします。

○武田国語調査官

配布資料2につきまして御説明いたします。

国語分科会の後、主査打合せ会をきちんと時間をとって開催することができないので、国語分科会の後に、主査打合せ会の委員の皆さんにはお残りいただいて、1時間ほど協議をしていただきました。本日の案は、その1時間の話合いと、事務局と主査打合せ会の委員を中心に、メールや電話のやり取りを経て作った案です。ですから、本日の段階では、直すべきところが多いのではないかと思います、その上でお話をしたいと思います。

前回、審議経過報告として示された段階では、「伝え合いのための言語コミュニケーション」というタイトルでした。それが今回お示しするものは、変わっております。ただ、このタイトルもまだ主査打合せ会で十分に詰めたものではありません。仮のタイトルとしてお示ししています。そして、タイトルについては後ほど、時間を取って御協議いただければと思います。

ほかに大きな変更点として、用語をかなり変えております。これにつきましては、参考資料2「タイトル案などについて」を御覧ください。これまでの言葉の上のコミュニケーションに関する考え方の整理をもう一度見直して、今回、新たな形でお示ししています。これまで、今後の課題として、もう一度考え直さなくてはいけないであろうと言われておりました。これまでは前回の報告案のような形になっていましたが、今回、改めてお示ししております。

参考資料2の一番上の図を御覧ください。今までの整理は、まず「コミュニケーション」というものがある。これは非常にぼんやりとしたものと言うか、いろいろな解釈が成り立つ、いろいろな方がいろいろな見方をするものとして、まず「コミュニケーション」がある。その中のうち、ちゃんとお互いの理解を深めていくようなコミュニケーションを「伝え合い」と名付けて、この報告では「伝え合い」ということについて検討しようということで、コミュニケーションの中に「伝え合い」という部分を作っていただきました。さらに、その「伝え合い」のうち最も核となるのは、言葉による伝え合いであり、その言葉による伝え合いは「言語コミュニケーション」と呼ぶというのが今までの整理でした。

これについては、いろいろと問題があって、一つは、コミュニケーションについて、この国語分科会で検討するということを言ってきた中で、その「コミュニケーション」という言葉が、非常に幅の広い意味のある言葉ですので、別の言葉に置き換えた方がよいという御意見がありました。一方で、やはり「コミュニケーション」という言葉の方がより分かりやすく、伝わりやすい面があり、それを本当に捨ててしまっているのかということ御意見もありました。

もう一つは、この報告の最初のところで、コミュニケーションというものが非常にもてはやされている、取り沙汰されているが、それが実は中身がはっきりと分からないのではないか、「コミュニケーション」という言葉では言い表せないものがあるのではないか、一旦、「コミュニケーション」という言葉を、否定ではないですが相対化しています。そこに「伝え合い」という言葉が出てくるんですが、一方でまた最後に、「言語コミュニケーション」という形で「コミュニケーション」という言葉が戻ってきているという問題がありました。これは主査打合せ会の中では話が出ていましたが、審議経過報告の段階までに整理し切れないうちに報告を出したということになっております。

今回、新たな整理として、「コミュニケーション」という言葉を、ある意味で真っ向から使うということ—ただ、これまでとももちろん考え方は変わっていません。「伝え合い」というのは、共通理解を図るためのコミュニケーションであるということとをずっと言ってきましたので、そこを「分かり合うためのコミュニケーション」と言っただうか。つまり、「伝え合い」という言葉だけだと、その先の「分かり合う」ということまでが見えてこない面もありますので、はっきりと「分かり合うためのコミュニケーション」と言っただうか。そして、さらにその分かり合うためのコミュニケーションの中核として言語コミュニケーションがある。もちろん「分かり合うコミュニケーション」の中核の言語コミュニケーションですから、正確に言う「分かり合うための言語コミュニケーション」ということになると思いますが、この「分かり合うための」という前段の部分は、場合によっては省略して使うこともあると思いますが、「分かり合うためのコミュニケーション」について検討し、そして、そのうちの「言語コミュニケーション」を中核、中心として考えましょう、そういった整理にしてはどうかということです。

「コミュニケーション」が非常に曖昧模糊としたものであるという御意見がありますので、そこであえてもう一度、「コミュニケーション」という言葉を戻す。このことについても、いろいろな御意見があるとは思いますが、ただ、主査打合せ会の中では、外に広く知っていただくためには、あるいは誤解を招かないようにするためには、こういった「コミュニケーション」という言葉を使って全体を整理し直した方がいいのではないかと議論になっております。

そうしますと、当然のことながら、タイトル案も変わっていくであろうということがあります。ここにタイトル案の例を三つ挙げております。「分かり合うための言語コミュニケーション」、「共通理解を図るための言語コミュニケーション」、「これからの言語コミュニケーション（＋副題）」と少し抽象的な言い方にして副題で少し詳しく説明するようなタイトル、そんなものも話題になっております。

もう一つは、「分かり合う」という言い方が、最後に四つの要素が出てきたときの「分かりやすさ」という言い方とぶつかるのではないかと意見も主査打合せ会の中にあります。ただ今回は、よりなじみやすい言葉を使うということで、「分かり合うための」という言い方をしております。場合によっては、「共通理解を図る」などと置き換える方法もあるかと思ひます。

以上、全体的なところで、どういった変更をしたのか御説明申し上げました。もちろん、考え方、趣旨、そういったものには特に変更はありません。以上です。

○沖森主査

御意見は後ほど頂くことにいたしまして、まずはただ今の事務局の説明と直接関わる質問があればお願いいたします。よろしいでしょうか。（→挙手なし。）

では、配布資料2について冒頭から幾つかに区切って御意見を頂戴したいと思ひます。今回は前回までのように逐一読み上げることはせずに、事務局から簡単に修正のポイントを説明していただいた後で、質問も含めて意見交換をしていただきます。

まずは冒頭の「はじめに」から「Ⅰ コミュニケーションに関する基本的な考え方」までについて修正のポイントを説明していただき、その後、協議に移りたいと思ひます。では、事務局からお願いします。

○武田国語調査官

先ほど御説明申し上げたとおり、用語が変わっておりますので、全体的に用語の入れ替えというようなことを行っています。そして、「伝え合い」という言葉が散りばめら

れておりましたので、なるべくそれを動詞形にして、「伝え合う」などにして残すよう心掛けました。ただ、その「伝え合い」に代えて、「言語コミュニケーション」や「コミュニケーション」など、これまで慎重に避けてきた「コミュニケーション」という言葉はかなり使用しています。

では、1 ページから簡単に御説明申し上げます。ここはまず、目次が非常に簡単なものになっていますが、これは現段階のもので、次回以降、もう少し詳しいものをお示したいと思っています。それから、凡例のようなページが必要かと思っています。例えば、「国語に関する世論調査」を取り上げるときに、「世論調査④Q○」などといった書き方をしておりますので、この中でこういった書き方をしているのかという凡例のようなものが必要だと思っています。

2 ページに参ります。2 ページの四角の中については、用語を少し入れ替えたりしておりますが、大きな変更はありません。

まず1の(1)「重要視されるコミュニケーション」の最初の◇です。これは国語分科会のときに御意見がありました。コミュニケーション能力が社会で重要視されているという書き方だと、コミュニケーションというものが、本当の意味で必要とされていると読まれてしまうのはどうかという御意見がありましたので、「コミュニケーションの重要性が話題になっている」という見出しに変えております。

3 ページに参ります。ここが一つ、今回の変更の最もはっきりと示すところになると思いますが、上から三つ目の◇を御覧ください。「分かり合うための働きに注目する」です。ここを読み上げます。

「では、望ましいコミュニケーションのイメージを、社会全体で分かち合うために、私たちにできることは何であろうか。それを考える上では、コミュニケーションと呼ばれてきた事柄のうち、どのような側面について取り上げるのかを、できるだけはっきりとさせなくてはならない。以下、その報告では、様々な意味合いやイメージで捉えられることのあるコミュニケーションのうち、情報や考え、気持ちを伝えあつて、共通理解を深めていくという働き、「分かり合うためのコミュニケーション」に焦点を当てていく。」

前回、ここは「伝え合いに焦点を当てる」という言い方をしていたんですが、「分かり合うためのコミュニケーション」としております。そして、2でも「伝え合いとは」から、「分かり合うためのコミュニケーションとは」となっております。

4 ページを御覧ください。これも国語分科会の中で御意見があったんですが、コミュニケーションは、送り手、受け手が入れ替わりながら行われるものであつて、話し言葉では…、書き言葉では…、そして、書き言葉のところに、「打ち言葉」のことも書かれていたんですが、「打ち言葉」を独立させました。「打ち言葉」でのやり取りが広がる」という◇のところですが、この報告では、「打ち言葉」という言葉を使うということをも明言しております。

そのほか、用語を少しずついじっております。また、主査打合せ会の委員からいろいろ詳細な御意見を頂いておりますので、細かいところはかなり変わっております。ただ、今申し上げた辺りが変更の大きなポイントになります。以上です。

○沖森主査

では、冒頭から5 ページまでについて、質問も含め、自由に御意見を頂きたいと思います。先ほどの説明にもありましたように、タイトルに関しては、最後に別に時間を取りたいと思います。そのほかの部分について、具体的な修正案や、更に検討すべきところなどがあれば、御意見を頂きたいと思います。

言葉、用語について少し整理を加えたという点もございますので、御自由に御意見、あるいは御感想でも頂きたいと思います。

○山元委員

2 ページの、教育でも対話が重視されているという中身です。「主体的に、対話を深めながら学ぶことを目指している」とあります。これは「主体的・対話的で深い学び」という学習指導要領の言葉を意識して書かれていると思うんですが、学習指導要領では「対話的で深い学び」という形で、「深い」は「学び」を修飾していて、「対話」とは別になっています。

「対話を深めながら」ということとは、ちょっとニュアンスの違うような使い方をしています。「深い学び」はここでは関係が余りないので、代案としては、「主体的で対話による学び合いが目指されている」とか、殊更「深い」を使わなくてもいいかと思いました。

○武田国語調査官

ここは元々「主体的・対話的」という、そのまま学習指導要領の言葉を使っていました。今、山元委員がおっしゃったように、「深い」という言葉を落としていました。ただ、「主体的」という言い方はともかく、「対話的」という言い方はどうだろうかということが話題になりまして、「対話を深めながら」となっております。ただ、確かに「主体的・対話的で深い学び」と、その「深い」と重なるところがあるかもしれませんので、そこは考えたいと思います。

○沖森主査

では続きまして、「Ⅱ 分かり合うためのコミュニケーション」について、御検討いただきたいと思います。6 ページから 12 ページまでについて、修正のポイントを説明していただき、その後で意見交換をお願いしたいと思います。

○武田国語調査官

まず、6 ページでは「(2) 理解し合うことが難しい人たちと」の最初の「◇専門家と非専門家がどう理解し合うか」のところですか。国語分科会の際に、これはこれからの課題ではなくて、今現在の喫緊の課題だという御意見がありました。そのときには金融の業界の例を挙げていただきましたので、その辺りを少し加えて、「例えば、医師と患者、金融商品の説明者と顧客との間でのように」という言い方をしております。そして、最後のところは、「コミュニケーションをとり共通理解を図るかは、これからの課題の一つ」という書き方を、「喫緊」と変えております。

次に、7 ページで特に変更が大きかったところは、一番上の「◇言葉に対する寛容さを欠いている」のところですか。ここまで、言葉に正解は一つであって、ほかは誤りだといった厳しい見方がある、というようなことが書かれていました。また、誰もがうまく表現する言葉が見つからないで苦労している経験があるのにもかかわらず、言葉の不十分さばかりが目立つということがあるのではないかとといった御指摘を委員から頂きまして、書き加えております。

その次の◇、語彙力のことです。後でもまた語彙力の話が何度も出てきますので、ここでもまたお話をしたいと思っておりますが、前回から「語彙力」という言葉の扱いについて、たくさん御意見を頂いています。それで、「語彙」という言葉の使い方ですか、前は「語彙の質」という言い方をしていましたが、そういった言葉が分かりにくいという御意見がありましたので、少し変えております。今後、この語彙の問題については更に詰めていく必要があるかと考えています。

7 ページの最後の「(5) 情報化の進展によるコミュニケーションの変化」は、◇が三つありますが、どれもかなり手が入っております。前回の国語課題小委員会で、親しい人に向けたつもりで気軽に発信したことが大ごとになることがある、ということが分かるようにした方がよいという御指摘がありました。それから知らない言葉に触れる機会が増えているということで、これは「国語に関する世論調査」の最新の結果の中で、スマートフォンが出てきたその時期に合わせて、流行語、新語、あるいは世代の違う人たちの言葉がよく分からないという人たちが、かなりの勢いで増えているという結果がありました。その辺りをより分析的に書いていただいております。

8 ページ「2 分かり合うために」を御覧ください。ここまでは現状を把握するという内容で、「2」からが今後に対する提案になります。タイトルなどは、是非御検討いただきたいと思います。が、「コミュニケーション」という言葉を飛ばして、その目的として今回示す、「分かり合うために」というタイトルになっております。

9 ページ「(1) 他者との歩み寄りを大切にする」では、四つ目の「◇外部の人には仲間内と違った言葉を用いる」について。ここも前回までは少し舌足らずなところがありました。が、かなり詳しく、この意味について、どういうことを言いたいのか書き加えられていると思います。特に最後の3行では、はっきとした形で、仲間内と違った言葉を用いるのは、どういうことなのかということが書かれています。

9 ページ「(2) 人の言葉には優しく、自分の言葉には厳しく」の間に「、」が挟まることについて、できれば解消したいという御意見がありました。ほかのところは全部解消しているんですが、現段階ではここだけまだ残っています。もしも、何かいい方法があったら、是非御教示いただければと思います。

それから、(2)の直後の◇ですが、「他者の言葉や」というように「他者」という言葉を使っていました。(1)では「他者」という言葉を使っていますが、(2)は「人の言葉には優しく」というように、ここは「ほかの人」と直しました。

9 ページから 10 ページに掛けて、「(3) 敬意と親しさをバランス良く示す」のところですが、10 ページの最初の◇を御覧ください。「◇敬語は大切だが全てではない」について、敬語は距離を保ったり遠ざけたりするような機能を持った言葉だということは、これまで言及されてきましたが、もう少しはっきりと「使い方によっては、お互いの間に壁を作り、もっと親しくなりたいという気持ちを拒む意思表示にもなる」ということを書き加えていただいております。

「(4) 語彙の量を増やし使いこなす」で、再度語彙の話が出てきます。前回、語彙の質について書いてありましたが、はっきりと詳しく説明がなかったので、語彙の質については、分かりにくいという御意見がありました。その質に関して、ちゃんと使いこなせるようにするということであろうと、少し書き方を変えております。ただ、ここについては、例えば、自分に必要な語彙と社会生活に必要な語彙という言い方をしていますが、その辺の境目がはっきりしない面もあります。

それから、「語彙」と言うときに、ある一定の言葉の集まりを指す場合と、単純に言葉という程度で語彙という言い方を使うこともあります。その辺りが、まだきれいになっていない面があるかと思しますので、今後、この(4)については特に御検討いただければと思っています。

12 ページを御覧ください。「◇言葉の重みを再認識する」について、ここもかなり大幅に加筆・修正していただいております。これまでは、例えば、スマートフォンなどでいろんな言葉を見るんだけど、ちゃんと立ち止まって、それと向かい合うことができないというような、そんなニュアンスのことがありました。ここをもう少し深めて、例えば、重要な言葉を見逃さないようにするという、また、そこにあるものをきちんと受け止めて、意味の取り違いがないように吟味するということまで、少し踏み込んで書かれています。

○沖森主査

では、6 ページから 12 ページについて、質問も含め、自由に御意見を頂きたいと思います。具体的な修正案や、更に検討すべきところなどもあれば、是非ともお聞かせいただきたいと思います。

○川瀬委員

もう本当に何度も何度も直して、修正、修正されていて、見るたびに、なるほどねってすごく分かりやすくなっているなということを、また今日も感じております。

そうした中で、私が違和感を覚えているのが、7 ページの「言葉に対する寛容さを欠いている」という断定なんです。私自身が寛容さを欠くタイプなので、余計引っ掛かるのかもしれないんですが、むしろ、その言葉に対してとか、コミュニケーションに対して、ほったらかしておいたから、ここまでねじれたんじゃないかなという気がします。でも、そうすると根本的に成り立たなくなってしまうんですが…。

例えば、せめて、この「◇言葉に対する寛容さを欠いている」のパラグラフの下から 3 行目、「しかし、そうした努力が察せられず」という言い方。「察せられず」というよりも、「察しようとせず」ぐらいかと思います。文章を読んでいて分かりにくかった部分もありますが、そうした努力を察しようとししないで、目先のことばかりにとらわれるのはよくないという言い方になると、寛容さを欠いているというのも、ふに落ちると思いました。

その後、(4) の二つ目の「◇若者だけの問題ではない」の 2 行目、「その傍ら、知識や経験、理解力が十分ある人々など、指導する立場にある人たちの」について、せっかく若者だけの課題ではないのであれば、ここに「年長者や」みたいなニュアンスが入ってもいいのかと思いました。

9 ページの(2) の「,」について、「人の言葉には優しく、自分の言葉には厳しく」という、日めくり説教的なフレーズがどうもむずがゆい感じがあります。「おおらかに受け止め、前向きに取り組む」とか、下の◇の二つのニュアンスみたいなものを、もう少し柔らかく出したらどうかと思います。「おおらかに受け止めながら前向きに取り組む」とか、「おおらかに前向きに」みたいな。そもそも、「分かり合うために」と大タイトルがあるので、その 1 番が「他者との歩み寄りを大切にする」と、2 番目は「おおらかに前向きにやりましょうよ」というような言い方ではどうかと思いました。

10 ページの敬語の部分です。「大切だが全てではない」の「全てではない」は、「万能ではない」とか、「最善の策とは限らない」とか、そういうニュアンスかと思います。言葉の選び方なんで、好みの問題なのかもしれません。

11 ページ、上から 3, 4 行目辺り。話し言葉については、同音異義語の多い漢語、二重否定というのが、出てきていますが、私どもの仕事の中では、やはりポイントを明確にする。話すためにはポイントを明確にするということがあります。それと、伝える順番を大事にしようということをよく申しています。したがって、漢語の多用、誤解が生じやすい言い回しに加えて、例えば、「ポイントを明確にしつつ、伝える順番を工夫するなど、意味が取りやすくなるよう」などはどうでしょうか。そこまで書くのもお節介かという気もしますが、一応、御提案させていただきます。

(6) の二つ目「◇考えや気持ちをはっきり言葉にする」。この「はっきり」も、「はっきり」がよいのか、「きちんと」くらいではないか。「はっきり」という言葉は「強く」という意味に取られ、強く主張しようみたいに聞こえないかな、見えないかなという気もしました。

○山元委員

9 ページについて。川瀬委員も御指摘をしていらっしゃった、「人の言葉には優しく、自分の言葉には厳しく」のところです。最初の◇に、「ほかの人の言葉や」ってありまして、次の行に「他者の言葉」とあります。私の語感がおかしいのかもしれませんが、「ほかの人」と言うと、それ以外の人という意味で私は使うものですから、「他者」の言い換えとして、「ほかの人」という言葉がいいのかどうか、また御検討ください。

○塩田委員

これは嘆き節としてお聞きください。今のところですが、この「人の言葉」の

「人」を、私だったら表外音訓に振り仮名を付けて「他人^{ひと}」と書くところなんですけれども、「人」と書くと、「人類」を指す「人」に見えてしまっていて、多分、放送だったら、平仮名で「ひと」と書くところなんです。それも公用文の表記に従えばできないので、仕方がなく、こうなっているということで悩みます。

あと、この「，」の問題は、スペースを挿入するという選択肢もあるかと思いました。

また、11 ページ（6）「◇コミュニケーションの中心は言葉による」は、ねじれているので、「…言葉による」ではなく「…言葉である」かなと思いました。

○滝浦委員

先ほど御説明の中で、「語彙」という言葉の問題があったと思います。今、パソコンで「語彙」で検索を掛けているんですが、確かにさっきおっしゃったと思いますが、「言葉」という言葉に置き換えて問題なく通じそうところが、全体の半分以上あるかとは思いました。

例えば、4 ページ辺りに最初に出てきますが、4 ページの（2）の二つ目の◇。

「すなわち知識や語彙の量」と出てくるんですが、こういうところは「知識や言葉の量」と言い換えて、多分余り問題ないかと思います。そうやって見ていくと、「言葉」で置き換えていって、何とかなりそうです。ただ、「語彙」という言葉を使っただけではいけないということでもないのですが、残すとしたら、何か特定の目的や機能を持った範囲でこの言葉を使用した方がよいのではないのでしょうか。自分にとって必要な言葉というのを、例えば、「必要な語彙」とか、「敬語の語彙」とか、そういう言い方で残していったら、一部分残るけれども、それは目的がはっきりした使い方にできるかと思いました。

○川瀬委員

この「語彙」は、「ボキャブラリー」とかにするのはどうですか。やはり文化庁としてはまずいんですか。世の中で、「ボキャブラリー」は日本語として定着しているかなと思うんです。むしろ「語彙」の方が、ぴんときないかと思います。耳で聞いた場合はですが。目を見たときは、「語彙」って見ると、何となく私の感覚では、「ボキャブラリー」に、感じる人が多いのかなとも思います。片仮名語はなしですか。

○武田国語調査官

できれば片仮名語ではなくということはありません。

○塩田委員

片仮名語なんですけど、日本語で使われるときについて言う場合、「ボキャブラリー」って、割と「…が少ない」とか、「…が貧困だ」というのと結び付きやすい気が

します。「ボキャブラリーが多くてらっしゃいますね」とは、なかなか言わない気がするので、ここは「語彙」かと思います。

英語を話しているんだったら、英語についてなら「ボキャブラリー」と言うかもしれませんが、日本語については、ちょっと言いにくい感じがします。

○田中委員

「ボキャ貧」って流行語があったからなんじゃないでしょうか。

○川瀬委員

そうですね。

○森山副主査

11 ページ（6）2 番目の◇、先ほど少し話題になったところです。例えば「必要に応じて」みたいな言葉を付けてはどうでしょうか。いわゆるアサーティブネス

（assertiveness）というんでしょうか、アサーション（assertion）みたいな問題を考えたときに、あえて言わないでおこうという選択も大事かと思います。

また、どこかでそういう自分の言い方を少し工夫するといったようなこと。同じことを言うのでも、いわばメタ的に、こういう語順で言おうとか、主語を「私」にしようとか、そういった工夫をやってみようというのにも入れたいと思います。それに関連して、言わないという選択もあり得るということも含めて、そういうのがあるといいかと思った次第です。

○沖森主査

続きまして、「Ⅲ 分かり合うための言語コミュニケーション」の、「1 言語コミュニケーションの四つの要素」というところについて御検討いただきたいと思います。新たに加筆されているところも多いところですので、説明していただいた上で、意見交換をお願いしたいと思います。

○武田国語調査官

それでは、Ⅲの1について御説明いたします。これまでは観点を余りはっきりと詰めないまま載せておりましたが、今回は、「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、「敬意と親しさ」という四つの要素をまず押さえました。その上で、各要素について留意すべき観点、それぞれの要素を生かす上で、どういうことに留意すべきかという観点を五つずつ挙げました。さらにそれらの観点について、実際どういうチェックポイントがあるのか、具体的な確認事項の例を示した形になっています。

ただ、こちらはまだ主査打合せ会での詳細な検討を経たものではありません。各委員とのやり取りの中で、随分修正がありましたが、まだ、ここはこれから十分に詰めていかなくてはならないところかと思います。今日は、こうした方がいいんじゃないか、こういう観点もあるんじゃないか、こういった留意事項もあるんじゃないか、といったことなどについて御意見を頂ければ有難く存じます。

では、時間もありますので、13 ページ「（1）「正確さ」」から読み上げたいと思います。

「（1）正確さ

「正確さ」とは、「伝え合う内容への配慮」である。コミュニケーションの目的が達成されるよう、互いにやり取りする情報、考え、気持ちなどを誤解なく、意図するとおりに伝え合うために必要な要素を指す。

「正確さ」に留意する上での主な観点

- 意図したことを誤りなく伝え合う語彙が使われているか。
 - ・専門とする分野に必要な語彙に精通し、それらを円滑に用いることができるか。
 - ・同じ専門分野の人と、専門用語を円滑に用いることができるか。
 - ・一般の人に対し、専門的な事柄を説明するための語彙を身に付けているか。
 - ・身に付けてきた漢字で構成される語彙の意味を理解し、運用できているか。
 - ・漢語と和語それぞれの長所を生かして用いているか。
- 言葉のルールにのっとっているか。
 - ・正しい言葉遣いと表現になっているか。
 - ・仮名遣いや送り仮名のルールを理解しているか。
 - ・漢字を適切に用いているか。
 - ・句読点や記号などを適切に用いているか。
- 誤解が生じていないか。
 - ・聞き違いが起りやすい言い方をしていないか。
 - ・人によって解釈が違ふ言葉があることに留意しているか。
 - ・同音語との取り違いを避けるよう努めているか。
 - ・文法に関わる行き違いを避けているか。
 - ・状況や文脈に合わせて言葉を選んでいるか。
 - ・複数の意味に取れるような表現をしていないか。
 - ・感情の行き違いにつながる言葉を使っていないか。
 - ・相手の意図が分からないときに確認しているか。
- 情報に誤りがないか。
 - ・誤った、又は、偽った情報を伝えてはいないか。
 - ・適切な裏付けを示すことによって、情報の信頼度を高めているか。
 - ・誤った、又は、偽った情報を真に受けていないか。
- 情報は目的に対して必要かつ十分か。
 - ・伝え合う必要のある情報が全てそろっているか。
 - ・目的を妨げる不要な情報が含まれていないか。

(2) 分かりやすさ

「分かりやすさ」とは、「互いの理解への配慮」である。互いにやり取りする情報、考え、気持ちなどを、相手と歩み寄りながら、言い換えたり、表現を工夫したりして、理解し合えるように伝え合うために必要な要素を指す。

「分かりやすさ」に留意する上での主な観点

- 互いの知識や理解力を洞察しているか。
 - ・相手が話題についてどれくらい知識があるかを洞察しているか。
 - ・相手の興味や関心の持ち方を洞察しているか。
 - ・相手の情報処理の速さや容量を洞察しているか。
 - ・洞察の結果に基づいて、話し方や書き方を調整しているか。
 - ・相手が自分の知識や理解力を知ろうとするのに対し協力しているか。
 - ・話題の前提となる情報を互いに共有できているか。
- 互いに理解できる語彙を使っているか。
 - ・自分や仲間内にしか分からない表現をしていないか。
 - ・相手の知識や理解力に合わせて、必要な言い換えをしているか。
 - ・難しい専門用語や外来語などを避ける工夫をしているか。
 - ・質問などによって説明を求めているか。
- 情報が整理されているか

- ・あらかじめ、相手や目的に応じて、情報を取捨選択しているか。
- ・必要な部分だけに絞り込んだり、要約したりしているか。
- ・重要な点をより詳しくし厚みを持たせるなどの工夫をしているか。

○聞いたり読んだりしやすい情報になっているか

- ・聞き取りやすいように声の大きさ、速さなどを調整しているか。
- ・文字の大きさや読みやすさ、レイアウト、字間、行間などに留意しているか。
- ・手書きでは、相手の読みやすさに配慮した文字を書いているか。

○構成が考えられているか

- ・話や文章の構成を工夫しているか。
- ・話題の中心が分かるようになっているか。
- ・最も言いたいことがはっきりと伝わるような工夫があるか。
- ・考えを裏付ける具体例やデータがあるか。
- ・論理的な内容になっているか。
- ・具体例やデータを適切に一般化し、自分の言いたいことに結び付けているか。

(3) ふさわしさ

「ふさわしさ」とは、「場面、状況や互いの気持ちへの配慮」である。やり取りする内容に関して、相手や状況に配慮し、互いにとってふさわしく感じの良い話題や言葉を選んでコミュニケーションを成功させるために必要な要素を指す。

「ふさわしさ」に留意する上での主な観点

○互いの気持ちに配慮された語彙を使っているか

- ・相手に不要な違和感・不快感を抱かせるおそれがある言葉を用いていないか。
- ・必要に応じて、適切な言い換えをしているか。
- ・必要に応じて、直接的な言い方を避けるようにしているか。

○互いに受け入れやすい話題であるか

- ・相手を不要に傷付けるような話題は取り上げていないか。
- ・論拠となる具体例やエピソードなどの内容に配慮があるか。
- ・用いている比喻の内容に配慮があるか。
- ・言いにくいことを伝える際に、受け入れられやすくする工夫があるか。

○場面や状況に合った言葉遣いになっているか

- ・会議や冠婚葬祭など、場面に合った言葉遣いをしているか。
- ・文書では、その目的に応じた書き方のルールにのっとっているか。
- ・仲間内と外部の人とで、語彙や言葉遣いなどを適切に使い分けているか。
- ・地域の言葉と共通語それぞれの機能に留意し、意識的に使い分けているか。

○伝え合う対象とその範囲や性格を意識しているか

- ・伝え合う相手がどのような人であるかを理解しようとしているか。
- ・個人的に発信又は受信したものが他の人たちの目に触れるおそれはないか。
- ・その相手と伝え合うことが適切な内容か。

○目的に合った媒体を適切に用いているか

- ・話し言葉、書き言葉、いわゆる打ち言葉のどれを用いるかを考えているか。
- ・伝え合う目的や内容に合った媒体を選んでいるか。
- ・匿名のやり取りと、実名でのやり取りとを適切に使い分けているか。
- ・拡散のされやすさを考慮しているか。
- ・電子データとして消去できない場合があることを理解しているか。
- ・伝え合う上で、相手にとって支障のない媒体を選んでいるか。
- ・必要に応じて、手書きをしたり、手書きの一言を添えたりしているか。

（４）敬意と親しさ

「敬意と親しさ」とは、「互いの関係性への配慮」である。伝え合いに参加する者同士が相手との関係性を踏まえて示す、敬意と親しさのバランスを心地良く保つために必要な要素を指す。

「敬意と親しさ」に留意する上での主な観点

- 伝え合う相手との関係性を考えているか
 - ・互いの立場や役割などを意識しているか。
 - ・互いの属する社会集団や年代などを意識しているか。
 - ・互いの共通点や異なりを意識しているか。
 - ・話題に上がっている人や第三者との関係を意識しているか。
- 敬意を適切に表せているか
 - ・相手を立てるべき場面で、適切に敬語が使えているか。
 - ・「召し上がる」、「伺う」、「参る」などの敬語語彙を使えるか。
 - ・品位を保つ言葉遣いができているか。
 - ・気遣いを表す定型句を使っているか。
 - ・目上の人に対してむやみに褒める表現を使っていないか。
- 親しさをうまく表せているか
 - ・決まった挨拶の言葉に一言添えられているか。
 - ・ちょっとした前置きの言葉などで配慮を示しているか。
 - ・素直に相手を褒める言葉を使っているか。
 - ・共感を示す言葉を使っているか。
- 互いに遠ざかり過ぎたり近づき過ぎたりしていないか
 - ・過剰な敬意によって相手を遠ざけていないか。
 - ・なれなれしく、失礼な口調になっていないか。
- 互いの言葉に対して寛容であるか
 - ・相手の気持ちよりも言葉の間違いを気にし過ぎしていないか。
 - ・自分の言葉遣いに十分気を付けているか。
 - ・相手から指摘があったときに、前向きに受け止めているか。」

以上のような観点と、それぞれのチェック項目を今のところ挙げております。

そして、17 ページの図ですが、前回のものと少し変わっております。それぞれの要素が、必ずしも、例えば、「正確さ」が優先されるとき、「分かりやすさ」が優先されるとき、そのときには、本来でしたら、例えば、「正確さ」が膨らんで、ほかのものが少ししぼむとか、そういったものが表せばいいんですが、それはなかなか難しいので、こういう矢印で、対立ではないですが、ぶつかる面があるということを表すように、全ての項目や両矢印で結ばれています。

それから、後ろに丸のようなもので、この全体がつながっているということを表そうということで、その辺りが付け加えられています。そして、吹き出しのところは、それぞれの要素に挙げた観点を五つずつ、そのまま並べています。もちろん、これは今後更に詰めていただきながら、順次直していくところかと思っています。

次節のところでも御説明したいと思うんですが、これまでQ & Aを実際に、特に主査打合せ会の委員を中心にお書きいただいて、ストックがあります。できれば、この観点、それからチェック項目が定まりましたら、これに合わせて、うまく並び直したいと思います。今回もその順序で並べているんですが、うまく対応するような形にできたらいいということも話し合っております。以上です。

○沖森主査

前回3ページであったのが、今回5ページ分になっているということもあります。では、お願いします。

○塩田委員

表現上の細かい話ばかりですが、14ページの一番上、「漢語と和語それぞれの」ということで、外来語をあえて外してあるのは、これは余り乱用してはいけないという意図も込めて、わざと外してあるのでしょうか。そういう意図は特にないのでしょうか。

あと、16ページ、真ん中辺り。「○敬意を適切に表せているか」と、「○親しさをうまく表せているか」が、ここだけ非常に浮き立って見えました。なぜかという、可能動詞プラス「ている」というのは比較的新しい表現だと言われていて、これまで全部普通の動詞プラス「ている」が使われているのに、ここだけ「できているか」、「表せているか」、「使えているか」が頻出してくるんですね。ここだけ違う人が書いたように見えてしまうので、いけないという意味ではなくて、ほかと合わせるのであれば、「敬意を適切に表しているか」、「敬語を使っているか」、「言葉遣いをしているか」でいいのではないかと思います。

○川瀬委員

観点、チェックポイントという言葉がありましたが、正直、これだけ並べられると、だんだんへこんでくるというか、胸が痛くなってくる感じがします。単純に好みの問題だとは思いますが、「○」の付いている太字の部分に関しては「…か。」はありだと思います。ただ、その下の項目に関しては、一例を挙げるだけでいいと思います。例えば、「…ができていますか」と聞くのが、下の項目のように感じます。余りにも最初から最後まで問い掛けられ過ぎて、結構切なかったです。これも全体的な表記の問題なので、考えていただければ結構です。

16ページ「(4) 敬意と親しさ」の二つ目の「○敬意を適切に表せているか」の中の最後の行、「・目上の人に対してむやみに褒める表現を使っていないか」というのは、これはちょっとニュアンスが違うんじゃないのかと思います。「あなたのことを尊敬していますよ」というのを、おべんちゃらと取り違えていませんかということをおっしゃりたいんじゃないかと思うんですが、そうすると、敬意を適切に表すというニュアンスと内容が違うような気がいたします。

17ページの表ですが、せっかく表にするのであれば、吹き出しの中の枠内は、もう少しすっきりした方がよいと思います。もちろん、「○」の付いた太字の部分をここに盛り込みたいのは分かるんですが、図はぱっと見た瞬間に分からないと余り意味のないものです。詳しくは前半に書いているので、ここは略した吹き出しの中でもいいのではないかと思います。

○滝浦委員

川瀬委員がおっしゃった点、私もそう感じます。多分、普通これを読む人は音読しないので、さっと流れていくと思うんですが、朗読されると、一々問われているみたいに聞こえます。回数が80回ぐらいあるので、そう思いました。でも、おっしゃったように、太いところだけ「～しているか」として、「以下のような点に考慮する」といいなどを書いて、以下は名詞的な表現にするのがよいかと思いました。

あと、具体的な項目の置き場所が、ここでいいのかというのは、たくさん見ていると出てくると思います。一応、(3)と(4)のところを注意して聞いていたんですが、(3)の「ふさわしさ」というところは、私のイメージだと、話題と場面がフォーカスされるのかと思いました。そうすると、例えば、最初の方で、「必要に応じて

直接的な言い方を避けるようにしているか」とありますが、これは中身ではなくて、多分、事柄に対する距離感みたいなことかと思います。そうすると、こういうのは四つ目の「敬意と親しさ」の方が近いのかなと。

ただ、四つ目を「敬意と親しさ」という言葉にしてしまったことで、少し中身が変わってくるところがあるかとは思っています。（４）の方の「互いの言葉に対して寛容であるか」というところの間違いを気にし過ぎてないかとか、言葉遣いに気を付けているかとか、もしかすると「正確さ」などに入れてもいいのではないかなどと思いました。割と「敬意と親しさ」は人間同士の距離感ということがフォーカスされるように理解していますが、そういったいろいろな御指摘はあるかと思っています。

○田中委員

全体として、並びの順番が結構行ったり来たりしているところがあるように思うので、例えば、言語単位の小さいものから大きいものへ、応答形から合意形、文法、それからそれ以外の運用の心得とかという並びにしたりとか、言語内的な要素から外的な要素に並べたりなど、配列は工夫した方がいいかなというところが随所にあるように思いました。

それと同じようなことで、実は同じことを言い換えているだけといったところも結構あると思います。裏表のものの言い方をしているところもあったと思うので、そのところは整理した方がよいと思いました。これは全体を見直すときの一つのポイントだと思います。

あとは項目によって違うので見出しを直すかどうかだとは思いますが、発信者に対する注意が中心ですが、時々、応答に関して入ってきています。発信も受信も、それから応答もと、両方入っていてもおかしくない見出しにする、若しくは、発信は発信、受信は受信、そして双方向のやり取りといったことにするか。何か、ここの水準が違うとか、矢印の向きが違うといったことが気になるので、そこも少し整理した方がよいと思いました。これが全体に関わる場所です。

あと、14 ページの最初の「○言葉のルールにのっとっているか」で、二つ目以降の項目は「ルールを理解しているか」、「適切に用いているか」と言っていますが、一つ目だけ「正しい言葉遣いと表現になっているか」となっています。前半のところで言っている、正しさとは何かとか、それは己が信じている何かだけのことなんじゃないのかと言っているのに対して、^{そご}齟齬があると思うので、ここを「適切な」とか、

「言葉遣いの現行のルール」とか、そういうことに照らし合わせて「逸脱していないか」などがよいと思いました。

同じページ、「（２）分かりやすさ」の１個目の「○互いの知識や理解力を洞察しているか」のところで、ここが見出しで「洞察しているか」と入っているからだと思いますが、上から四つ目までは「洞察」が入っていて、四つ目から、「洞察」の上に調整とか、協力しているかとか、共有できているかとなっています。双方向に推測をしながらやるといったことについて「洞察」という言葉を使っていると思いますが、「洞察」という言葉は、全体の書きぶりから、若干浮くのかなと思うので、考えてみてもいいのかと思いました。

15 ページ、１個目の「○聞いたり読んだりしやすい情報になっているのか」の、２個目の項目で、これも自分も後で気が付いたんですが、大きさとか読みやすさ、レイアウト、字間、行間だけじゃなくて、色の見え方の話について、多分、今、教科書などは、すごく配慮しています。ユニバーサルデザインの色調とか、隣り合う色などについては、校正の段階で検討のときにも変えたりしているので、色に対する配慮も入れていいかと思っています。自分もパワポを作っていて、学生に、「これとこれの色の違

いだと分かりにくいから」と言われたりすると、「あ、そうなんだ」と思います。自分では気付かないところなので、色など入れてもいいと思いました。

それから、16 ページ「(4) 敬意と親しさ」のところで、二つ目の「○敬意を適切に表せているか」で、1 個目の「・相手を立てるべき場面で」と言っていて、2 個目も謙譲語といったことで、話題の敬語を中心にしているのかと思いますが、聞き手への「です・ます」といったことについても入っていいと思います。だから、ここで、やっぱりタメ口的ではなくて、「です・ます」とか、品位保持のための丁寧語とか美化語の使用とか、そういう言葉を使わなかったとしても、特に聞き手配慮について、関係性については入っていた方がいいのではないかと思います。

16 ページの上のところの三つ目「・電子データとして消去できない場合があることを理解しているか」の部分、どの電子データの何をイメージされているんでしょうか。ウェブ上のデータの何をイメージされているんですか。例えば、ウェブに 1 回出たら、生涯そのままだということですか。

○武田国語調査官

そういったイメージでした。

○田中委員

何か分かりにくいかもしれない。でも、自分もどう言ったらいいのか、よく分かりませんが…。

○入部委員

できるなら見開きで収まるぐらいにすると、心の負担がないかもしれません。数の問題です。大きな見出しが五つに 3 項目ずつか、あるいは大きな見出しが三つに 5 項目ずつかといったような、見開きで 15, 15, 15, 15 ぐらいで収まると、何とかやれそうかなという見通しが立つかもしれません。重複しているものを少しまとめたりして、本当にやれそうだという気持ちを持たせることも大事であるように思います。できたら見開きで収めてほしいと思います。

現時点だと 78 あります。それに対して Q & A が 32 ということで、恐らくそれぞれについて Q & A とリンクさせていくんだと思います。リンクさせたときに偏りがあるのであれば、その辺はきれいに削除して、バランス良く Q & A と結び付くようにしていくと、15 ぐらいで収まると思います。

○山元委員

大きく二つあります。

13 ページの最初から 5 行目ですが、「その中核を担うのは、言葉によって伝え合うこと、つまり「言語コミュニケーション」である」、この部分の「伝え合い」は「分かり合う」に変えた方がいいのかどうか。今回の修正に合わせて、疑問に思いました。

2 点目は、先ほど入部委員がおっしゃった、やる気が出る紙面にするためにはということです。私は「…していないか」と言われるより、「…をしている」という言い方にして、最初の中黒点（・）を四角（□）にして、チェックを入れられるような形にします。「これができている」という紙面になると、どのぐらいできているかと、読む意欲が湧くような気がします。ですから、「…していないか」ではなくて、「…をしている」といった語尾で書いた方がよいと思いました。

あと、細かいことですが、15 ページの「ふさわしさ」の例についてです。疑問は、話題について、やり取りをする内容というのがまずあって、その内容を伝えるに当た

って、場面、状況、お互いの気持ちということをふさわしいものにするという意味なのでしょうか。そうしたら、まずは、話題そのものを選ぶということがありますね。二つ目の「〇互いに受け入れやすい話題であるか」です。話題そのものを選ぶことが観点になり得るのかという疑問が湧いております。それで、ここのところは話題を上げるか上げないかということが一つと、それから相手と状況と媒体です。そういう整理ができるのではないかと思います。そうすると、4番目の「〇伝え合う対象とその範囲や性格」、これは媒体に入るものと入らないものがあるのかもしれませんが、必要かどうか疑問を持ちました。

それから、一番上の「〇互いの気持ちに配慮された語彙を使っているか」ですが、「互いの気持ちを配慮した」、そんな書き方がよいかと思いました。

○福田委員

14 ページの「〇情報に誤りがないか」は、「正確さ」のところに入っている見出しですが、話や、書く情報に誤りがないかどうかというのは非常に難しいことかと思えます。つまり話し手や書き手は合っていると思って情報を発信している。

わざと偽った情報を伝える場合には、詐欺とかになってしまって、それは多分、このテーブルに乗る話ではありません。しかし、自分の考えを述べるときと、客観的に知っていることを伝えるときの語彙と、推測を言うときのと違っていて、それが推測と分かるように言いましょうとか、そういうことだと思うので、御検討いただければと思います。

17 ページの図については、私も川瀬委員に賛成で、吹き出しは取ってもいいかと思えます。

○石黒委員

それぞれの四つの要素の定義が分かりにくいと思いました。二重の意味です。

例えば、13 ページ「正確さ」とは…」と言って、普通の人に何も示さないで、ここに括弧に入れてくださいと言ったら、「伝え合う内容への配慮」である。」ということにはならないと思います。普通で言えば「誤りなく伝える伝え方」などになるかと思えます。だから「正確さ」とかぎ括弧が付いているのは、「正確さ」という要素であったり、「正確さ」という観点であったりするのかもしれませんが、それでもこのままつながってしまうと分かりにくい。元々「正確さ」や「分かりやすさ」というものが、私の感覚では副詞から発生してきています。つまり正確に伝える、分かりやすく伝える、ふさわしく伝える、ということです。「敬意と親しさ」は、親しく、あるいは丁寧に伝えるものだと思うので、そうすると例えば、「正確さ」であれば、「誤りなく伝える伝え方である」とか。また次の「分かりやすさ」であれば、「相手や受け手が理解できる伝え方」とか、そんなふうにした方がよいと思います。

今度は、内容の面です。「分かりやすさ」と「敬意と親しさ」に関しては、中身自体はよいと思いますが、「正確さ」は伝え合う内容にも配慮なのかというところが分かりにくいです。

むしろ、元々お使いのというか、「正確さ」であれば、13 ページの中ほど、3 段落目の 4 行目に書いてある「これは互いにとって必要な情報を、誤りなく、かつ過不足なく伝え合うことである」、この辺りの内容の言葉をうまく使うと、多分、「正確さ」にうまく反映されると思います。「ふさわしさ」がやはり出入りが厄介で、これはどうしましょうかという、先ほど滝浦委員がおっしゃったことが、私もそうだなと思いながら伺っていました。何か一言でうまくまとめられるといいなと思います。もちろん、それが媒体であったり、確かに聞き手や読み手の心情であったり、あるいはその場面や状況であったりということが、いろいろありますが、うまい言葉じゃない

と思いつつも、例えば一言で「場との調和が取れた伝え方」など。

その場の中にいろんなものを含んで、その場と話題とか、場と言葉とか、個々の表現とか、そういう二つのものの調和ということがうまく伝わるように、何かいい言葉ができればなと思います。

○やすみ委員

私は全体的な感想になりますが、非常に項目がいっぱい立っていて、非常に練られて、まとめ上げられているなという印象を持ちました。

そんな中で、コミュニケーションの会議に参加させてもらって、コミュニケーションって答えが本当に欲しいし、あるようで、結局ないんだなと、いつも感じたりします。だから、この非常にまとまっている中にも、もう少し欲を言えば、提案、こんなふうにしてみたらどうですかというような、表現も含めてソフトな感じで投げ掛けてみるような部分があると、多くの人が、この冊子を手にしたとき、すごくよりどころにしてくれるんじゃないかなと思いました。

あと、例えば、表現でいうと、「しているか」とか、「していますか」となっています。「今、あなたはどうか」という確認をすることも大事ですが、さらに、こんなふうにしてみたら、より良く毎日のコミュニケーションができますよ、というようなお誘いみたいな感じがあると読みやすくていいのかなと思いました。

○塩田委員

「正確さ」に関して、「○意図したことを誤りなく伝え合う語彙が使われているか」のところに入るのか、「○誤解が生じないか」に入るのか、あるいは別で立てるのか分かりませんが、具体的な表現を心掛けるということが入っていないことに、今、気が付きました。例えば、「夕方までに提出してください」ではなく、「夕方4時まで」ときちんと言うとか。「三日まで出てきません」と言うとか、二日まで休みなのか三日まで休みなのか分からないから、「二日まで休んで三日から出てきます」と言うか、「三日まで休んで四日から出てきます」とはっきり言うとか。あるいは「ビール二、三本持ってきてください」か、「3本持ってきてください」か、場合によって言うとか。常にそのように言うべきだということではないのですが、場合によっては何か具体的な表現を心掛けることが必要だということを、どこかに入れてもいいかと思いました。

○入部委員

17 ページの図ですが、こうしたらいいという代案がないので、どうしようかなと思っていますが、この矢印が引っ掛かります。自分ができれば何ということはないんですが、矢印は対立する側面も持っているということを表したものだと思いますが、バランスと言いながらも、この矢印があると、調和ということとちょっと違うような感じがします。そういう側面も持っているという、そのぐらいのニュアンスが伝わるようにできたらいいかと。これだと、はっきり対立している図式になっているような気がして、さじ加減だと思いますが、工夫していただけると有難いです。

○森山副主査

先ほど、やすみ委員がおっしゃったことに私も大賛成です。何となく「当たり前じゃん」と言われるのが一番怖いと思います。例えば、誤った情報を伝えてないかって、それは当たり前じゃないかというところがあると思います。したがって、ヒントみたいに、例えば「こうしたらいいですよ」という情報提供的な言い方にしてみてもいいのではないかと思います。

具体的に申しますと、例えば、13 ページの下から2 行目「・一般の人に対し、専門的な事柄を説明するための語彙を身に付けているか。」ですが、一般的な人に説明するための語彙だったら、当然身に付けているはずだと思います。例えば、上手に比喻を使うと分かりやすいことがあるとか、言葉に関して少し説明をすると分かりやすいことがあるとか、そういう具体的なやり方を挙げるといようなイメージです。

ほかにも、先ほど問題になった、14 ページ「○情報に誤りがないか」ですが、誤っていなくても適切でない場合があるとか、こういうことに気を付けたらいいということを入れるといいと思います。

また、「ふさわしさ」のところだと思うんですが、「あなたの言うこと分かりにくいです」と言うのは、相手に受け入れられにくいと思います。しかし「私はあなたのおっしゃったことが分かりませんでした」とか、「今おっしゃったことはよく理解できませんでした」という表現だったら、相手に受け入れられやすいと思います。そういう言い方の工夫は、「敬意と親しさ」の問題か「ふさわしさ」の問題だと思うんですが、そういったところも入れたいと思います。

それから、14 ページに「・仮名遣いや送り仮名のルールを理解しているか。」とありますが、この部分も、例えば、常用漢字表とか、平仮名の情報はここを見たらいいですということが、ここに書いてあってもいいのかと、迷いながら思います。

例えば、「分かりやすさ」のところでも、分かりやすくなかったり、あるいは誤解が生じたりする原因は何かと考えますと、文脈が共有できていない場合が多いと思います。どちらに入れるか迷いながら言うんですが、文脈の共有ということに関して、どこかで挙げたいと思います。

情報提供的に、こうしたらいい、チェックポイントはこういうところだ、というのを出すような書き方で、お徳感を出すような工夫ができたらと思いました。

○川瀬委員

考え方だと思うんですが、その後ろのQ & Aが、徹底的な「こうしましょう」の提案です。「こういう方法があります」、「こういうふうに考えてみたらいかがですか」というのが、18 ページ以降の「2 様々な言語コミュニケーション」からという具体的なシチュエーションが出てくるので、ここでは、「こういうところは大丈夫ですか」ととどめていいんじゃないのかという気もしますが、いかがでしょうか。

○森山副主査

少し補足をさせていただきます。確かに詳しいことは後ろの方でありますので、詳しいことを一々言わなくてもいいのかもしれませんが、ただ何となく、「あ、そうなんだ」と言える内容の情報と、「それはそうだろう」と言える内容の情報があって、「それはそうだろう」というのは少なくともいいのかと思いました。「あ、そうか。そう言うとそうだね」というところが少しでも多い方がいいかと思います。「それは、こういう工夫があるよ」とか、「こういうところ、どうしても忘れてしまうよ」みたいなところですね。意識的に挙げる形で、後ろのQ & Aに詳しくありますが、そこまで読まれない方もいらっしゃるかと思いますので、申し上げました。

○山田委員

四つの要素ですが、全体的なイメージとして、やはり言葉でお互いにやり取りをするというのがイメージされているのかと思います。しかし、所々文章が正しく書かれているとか、書き方を調整するとかが入っています。

どちらかに絞った方がいいのか、あるいはそういった対話での留意事項なのか、あるいは書き方の留意事項も全部含めて入れるのか、というところはどうなのでしょう

という気がしました。

○沖森主査

では、最後の部分「2 様々な言語コミュニケーション」の部分について、18 ページ以降ですが、修正のポイントを説明していただき、後で御意見を頂きたいと思います。

○武田国語調査官

それでは、最後の、これまで Q & A と言ってきたところですが、今回、「様々な言語コミュニケーション」という言い方にしています。ただもしも、「1 言語コミュニケーションの四つの要素」の要素と観点について、ここでより詳しくということになると、例えば、「様々な言語コミュニケーション」という言い方ではなく、観点と留意事項が分かるような、そういうタイトルに変わるのかもしれませんが。

さて現在、ここには 32 問挙がっています。御覧いただくと分かりますが、所々これからこういうものを加えたいという空のページ、形式だけ載っているページもあります。それを一緒に見ていただくと分かると思うんですが、この一つ前の節の観点、それからそれぞれのチェック事項に順番に対応していくような並べ方に、そういった形になると分かりやすいだろうと思っています。

ただ、当初、Q & A はかなり膨らますというイメージがあって、多いときには 100、200 と、そんな話が出たときもありました。その段階では、そういった四つの要素にそれぞれ五つの観点というような目論見はありませんでした。ここに挙がっているものは、ある部分については一つの観点について詳しく、幾つもの事項があったりします。例えば、正確に伝え合うためにに関して、26 ページ、27 ページに、「国語に関する世論調査」の結果を使って、慣用句などで意味が変化してきているもの、もう本来の意味でないものが多数派になっているものなどを挙げています。それから片方のページでは、正反対の意味で使われることがあるので、気を付けなくてはならないようなものが並んでいます。例えば、これが 2 ページにわたって必要なのかという問題があると思います。こういったものを整理しながら、できれば観点、要素に合う形で、Q & A を整理していきたいと思っています。

そうすると、前回の国語課題小委員会でも御発言がありましたが、Q & A と今まで言ってきましたが、本当に数も少なくなっておりますし、また、内容もそれほど当初考えていたような具体的なものではなく、少し抽象度の上がったものになる場合、Q & A という形式にこだわらなくてもいいのではないかという御意見もありました。

もう一つは、具体的な問題を取り上げれば取り上げるほど、どうしても別の考えがそこには必ず出てくるという面もあります。ですから、事柄を細かく細かく掘っていくと、なかなか賛同が得られなくなります。「これは国語分科会の意見なのかもしれないけれど…」というような捉え方をされる可能性もあります。

ですから、Q & A が当初と少し考え方が変わってきておりますので、もう一度、この内容をどうするかということについて整理をしていただいた上で、これまでお書きいただいている原稿を生かしながら、うまくⅢの 2、Ⅲの 1 のところまでと、呼応するような、そういった形を、最後、調整できないかと思っています。

今挙がっているものは、先ほど申し上げたように 32 問で、できるだけ、その一つ前の要素と観点に合うような形で並べています。ただ現在は所々抜けがあったり、先ほども申し上げたように、一つの観点について問いが幾つかあったり、という状態になっています。以上です。

○沖森主査

では、18 ページ以降につきまして、自由に御意見を頂きたいと思います。

○塩田委員

これは、全般的に皆さんが書いたものを、ある程度事務局の方で、書き直しをされているものなのでしょうか。

○武田国語調査官

はい。まず、今日お出ししたところでも、かなり直しているところがあります。もしその要素と観点に合わせるのであれば、大きく直さなくてはいけないところも出てくると思います。今は、せっかくお書きいただいたものがありますので、それを極力生かしたいということがあります。ただ国語課題小委員会として、今まであるものをかなり変えてでも、要素と観点に合わせた方がいいのではないかということであれば、そういう方向で、主査打合せ会の方で検討していただくことになるのかと思います。

○山元委員

私はQ & Aのスタイルはよいと思います。「そうよ、そうよ、これ知りたかったのよ」といった誘い水になります。ですので、一番上の括弧の中も、ゴシックよりも、その下の、これは何なんだろうということを中心に前面に出して、でも、それは中身でいうと、ゴシック体で書かれた部分に対応しているんだよ、といった位置付けの方が分かりやすく、ふさわしいと思います。前段に書いてあることへの対応というのを余り強く考えないで、考えるにしても、日頃みんなが考え、疑問に思っていたことを前面に出した形がいいのではないかと思います。

ざっと見た感じで、26 ページQ 9「^{げき}檄を飛ばす」という言葉のデータの情報とか、本来の意味とは変わった意味があるとか、こういう情報があれば、非常にお役立ち感があるように思います。ですから、国語分科会の意見という形ではないようなもの、つまり、データの的にもこれは間違いがなく、具体的に書けるものがあれば、読んで役に立つという思いで見てもらえるのではないかと思います。

○川瀬委員

18 ページの1 行目「2 様々な言語コミュニケーション」。2 行目「(1) 言語コミュニケーションに関する基本的な考え方」。枠囲みでQ 1。この並びがしっくりこない。例えば、13 ページのⅢの部分、先ほど多いとか、もっと整理した方がいいとかいろいろ御意見があった、Ⅲのところを何らか整理していただいて、「解決方法についてはQ ○で」とか、そういう呼応の仕方がよいかと思います。

Q 1につながる言葉は、「言語コミュニケーションをうまく行うためには、そのようなことを…」なんじゃないかと思います。聞きたいことは、「言語コミュニケーションを支える四つの要素」って何ですか、ではありません。やっぱりQ 1という言葉の辺りに質問文が来てほしいと思います。でも、その肝が「言語コミュニケーションを支える四つの要素」のことですというのが分かるためには、Ⅲの1 と呼応させるのか、それとも表記の工夫で解決できるものなのかという気もします。

あと、分量についてです。この一つの問いに対する答えの量。解説がすごく充実していると思いますが、結構びっしりしているという気もします。それこそQ & A本ではないので、これぐらいの分量は必要なのかなという気もします。だから、例えば、Q とAの部分だけ枠で囲むとか、下の解説部分は、その枠から出しておいて、ここは興味があったら読んでくださいといった見たいにするのか、表記の仕方でもう少し分

かりやすくなるんじゃないかなという気がします。

○入部委員

私も川瀬委員と同じで、13 ページからのところとちゃんとリンクしているのは絶対必要だと思います。例えば、ウェブ上で載ったときに、それをクリックすると、Q & Aに飛ぶような、そういう作りも将来的に考える機会もあると思います。そうすると、この並び順でいいのか、どちらを操作するのかというのがあると思うんですが、川瀬委員と同じように、18 ページのところが気になります。Q & Aとはちょっと違うかなと思います。今までのところの要約みたいになっているので、今まで、これについてずっと読んできたのに、またここで読むのかという感じになります。

ここのところは川瀬委員とは違う観点かもしれませんが、これが最初にあると、まず要約を読んでから、順番に読ませるという、そういう手続的な感じもしなくもないです。最初、これがボンと来ちゃうと、これを順番に読んでいこうとしたときに、この作り方はちょっと重いかなと思います。Q & Aという感じがしません。

○沖森主査

では、残された問題もございますので、18 ページ以降につきましては以上にいたします。最後、タイトルについて意見交換をしていただきたいと思います。

今回の案は、先ほどの説明にもありましたように、根本的に趣旨や考え方を変えたというわけではありません。用語の整理の仕方ということで、変わっているわけです。しかし、タイトルですので、非常に重要な問題です。まず、この点について、事務局から説明をお願いします。

○武田国語調査官

それでは、説明いたします。まず一つは、今回、これまで「伝え合い」という言い方を使っていましたが、それに代えて「分かり合うための言語コミュニケーション」という言い方を使っております。この方針でよいのかという問題があります。

もう一つは、「分かり合うための」という言い方が、「分かりやすさ」といった、四つの要素の言い方と重なるところがあって分かりにくいという声も頂いております。その辺りを含めて、例えば、「分かり合うための言語コミュニケーション」というタイトルでいくのか、あるいは、「共通理解を図るための」という言い方にするのか。もっと抽象的に、「これからの言語コミュニケーション」という言い方にするのか、いろいろな考え方があると思うんですが、是非、ざっくりばらんに御意見を頂いて、主査打合せ会で、また御検討いただきたいと思います。タイトルに関して、余りここで今決めるということではなくて、是非とも自由に御意見があれば伺いたいと思っております。

○沖森主査

次回に予定されております12月15日の国語課題小委員会で一定の方向性を出せればいかと考えております。それに向けて、本日は本当に御自由に御感想等をお願いしたいと思います。それを持ち帰って、改めて主査打合せ会で検討したいと思っております。では、お願いします。

○塩田委員

今回の事務局案「分かり合うための」が一番よいと思います。一つは、2番目の「共通理解…」だと、どうしても情報性の方が際立ってしまっていて、「正確さ」のところに重点があるのかと、一瞬誤解してしまうからです。「これからの…」が、ちょっ

と、これは現在の問題でもあるので、仮に曖昧なものなのだととしても、「これからの」だと、この内容にはそぐわないような感じがします。

「分かりやすさ」との問題ですが、たまたま「分かる」という部分が競合しているだけで、これは別に差し支えない。「分かりやすい」は形容詞だし、「分かり合う」は動詞だし、いいんじゃないかなと思います。

○山元委員

タイトルは、例の三つ目がいいかなと思います。「伝え合う」より「分かり合う」の方が一步踏み込んでいるので、私も賛成です。「これからの言語コミュニケーション」と言って、「それは何だろう」と聞いておいて、そして副題を付ける。副題は「互いに分かり合うために」とか、「分かり合う関係作りのために」とか、そういった副題で「分かり合う」というのをを使うのも一つかなと思いました。

○川瀬委員

「伝える」と「分かる」と、何かすごく表と裏な感じがして、どっちも残したいですが、だめですか。「これからの」という、ここの5文字がすごく引っ掛かります。

「これからの」話だろうとは思いますが、「改めて考える言語コミュニケーション—伝え合う、分かり合うために」とか。考えていると、どんどん長くなってきます。

若しくは安直な番組のタイトルみたいに、「これで安心」みたいになってきちゃうんで、そうすると、ちょっこの国語課題小委員会として出すには似合わないという気がします。どっちかというより両方残したい。伝え合うことも大事だし、分かり合うことも大事だということを話し合ってきた気もするので。そのように思います。

○塩田委員

あと、もう一つ。私が「分かり合う」のが、なぜよいと言うか、そこをくどい言い方で言いますと、「伝える」というのは、結果を含意していないけど、「分かる」というのは含意しています。どういうことかと言うと、「伝えたけど伝わらなかった」というのは、これは完全に成り立つ文なんです。だけど、「分かったけど分からなかった」というのはあり得ないわけです。要するに、「分かる」というのは既に行為が成功していることを含意しています。「お前の言ったことは分かった。伝えておくよ」と言うのと、伝えるだけで、それがきちんと向こうに分かるかどうか、やっぱり分からないんです。そういう意味でも、「伝える」と「分かる」を比べると、「分かる」を基にした「分かり合う」の方が良いと思います。

○川瀬委員

これを手に取る方はどういう方かというのが、何度も何度も聞いている話なんです、そこにもよるのかなと。

○滝浦委員

質問ですが、「これからの言語コミュニケーション」というタイトルは、「これからの敬語」を意識されたんでしょうか。

○武田国語調査官

そのとおりです。例えば「これからの時代…」など「これからの…」は、よく使う言葉です。そういったものを少し踏まえると、こういうものがあるかなと。

○滝浦委員

論理的には、塩田委員はじめ、これはおかしいでしょうというのは、そうなんです
が、「これからの…」というのは、提言のワーディングとしてはあり得るものです。
「これからの敬語」は1952年に出され、半世紀ちょっとたって、今、改めてこうい
うものを出しますという出す側のメッセージとしては、あり得るのではないのかなと。
ただ、絶対副題は必要だろうと思います。論理的に変だというのも分かるんですけ
れど…。

○やすみ委員

今、三つ挙げていただけてますが、その中だったら、私はやはり「分かり合うため
の」か、それか、まずは「これからの…」と言って、副題でもうちょっとしっかり見
せるというのがよいと思います。

いずれにしてもコミュニケーションは、テクニックももちろん必要なんだと思いま
す。こうやって、Q&Aとか、いろいろな部分も、提案とかも欲しいって先ほど申し
上げたので、その方法も知りたいんですが、結局、これからの時代、もっと心を見つ
め直すというか、コミュニケーションしていく中で、本当は表立った言葉とか、しぐ
さとか、そういうものじゃなくて、心をもっと見ていけたらよいねと、そこに持って
いけたら、更によりと思います。どんなタイトルが付くにしても、もっと心を感じ合
うとか見せるというような雰囲気日本語の言葉が一つ入ると、すごくよいのではな
いかと思います。

というのは、例えば、分かり合えなかったというコミュニケーションを取ることも
あるわけです。でも、そこで心を見せ合っていれば、分かり合えなかったことも一つ
趣があったと感じるといったような、そういう人間関係も、私たちの人生の中ではあ
ると思います。その辺も救っていくような言葉があるとよいかと思います。

○沖森主査

それでは、タイトルの件も含めまして、報告案全体につきまして、一言言い添えた
いことがありましたら、併せてお願いします。

○山元委員

この間の国語分科会のときに、リーフレットの的なものを作って、広く、あまねく周
知するというような御提案があったと思うんですが、そういった見通しはありませ
か。

○武田国語調査官

予算の問題などもありますが、私たちの中では、少し今、検討をしております。た
だ、それを本当に実現できるかどうかということではありますが、検討はしており
ます。できるだけ実現したいと思っております。

○山元委員

A3裏表ぐらいのものがあれば、機会を捉えて、いろんなところで紹介できるの
で、よいなと思っております。

○入部委員

先ほどお話ししたとことと重ねてになるので、くどいようですが、12ページまではほ
ぼ完璧だと思いますが、13ページからの見せ方が、正に報告書の見せ方になるかと思
います。例えば、これを表のような組み方にできるかどうか。表の中に項目と、Q&
Aのリンク先を入れられるか。リンク先というかページと、あとその項目を張り付け

て、見やすくする。

経済産業省の社会人基礎力のような形で、何か表に。見開きの大きな表でいいと思うんですが、何かそのようないい見せ方ができると、このグラフと合わせて、先ほど山元委員がおっしゃったような、リーフレットになったときにも見栄えのするものにつながっていくと思います。そのようにしてくださいと言うと失礼な感じですが、よろしくお願いします。

○沖森主査

では、本日も熱心に御議論いただきまして、誠にありがとうございました。頂いた意見を踏まえまして、主査打合せ会で内容を煮詰めまして、次回の国語課題小委員会で改めて御検討いただきたいと思います。

それでは、本日の国語課題小委員会は、これで閉会いたします。本日は、御出席、どうもありがとうございました。